
神様の落とし物

まうしー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様の落し物

【Nコード】

N1530T

【作者名】

まうしー

【あらすじ】

ごく普通の高校三年生、神崎直人は、平凡な毎日を楽しんでいた。しかし、ある朝、「神崎直人の神」と名乗る男が現れる。そして、「神崎直人の神」は、容赦なく直人を奇怪なことに巻き込んでゆく。ノーマルな人、神崎直人と、神崎直人の神、ジャトランセが繰り広げる物語。

プロローグ

「ほんじゃあ、行つてきまゝす」

俺は、いつも通り家を出る。

今日も学校だ。別にダルいなんて思わない。

確かに授業は嫌だが、休み時間には友達と遊べる。そんな楽しい時間が、俺を待ってる。

こんなに朝早く家を出るのだって、そんな楽しみを楽しみにしているから。

清々しい朝。今日も軽い足取りで、登校する。

いつもの角を曲がる。すると――

「へえ、珍しいもんだな」と思った。なぜなら、こんな時間に、俺と同じ年くらいの奴が道に立っている。

まるで、誰かを待っているかのように、電柱によさりかかっている。

身長は俺と同じくらい。性別は男。体系は細身で、髪は短髪。シ

ヤキつとしていて――俺にそっくりだ。

だんだんと、そいつに近づいていく。

そして、そいつの横を通ろうとしたとき――

「ちよつと待てよ、神崎直人」

俺は、一瞬ドキッとしてしまう。

なんだ？　なんで、見ず知らずのこいつが俺の名前を知っている？

俺は、歩みを止めず、なおかつ動揺したのを悟られないよう、無視して行こうとする。

「おいおい、そりゃねえだろうよ。なんてったって――」

尚話しかけてくるそいつに、俺は思わず振り向いてしまう。

「俺は、お前なんだからな」

「……は？」

俺は、話しかけてくる男の顔をまじまじと見る。

「…え？ウソだろ？」

そう言わずにはいられない。誰もがそうなるだろう。

そして、俺はようやく気付く。

今、俺の目の前にいる男。それは、俺そのものであった。

「安心しろ。他の奴に俺は見えてない。俺を見れるのは、お前だけだ、神崎直人」

「ちよつと待て。勝手に話を進めるなよ？」

俺は、一方的に話を進めようとする、俺に瓜二つの男——と言うより、俺の分身——を止める。

「まず、自己紹介してくれませんか？僕の名前は知ってるみたいですし、あなたの名前を…」

初対面だし、とりあえず敬語を使っておこう。

「はっはっはっは！！さすが俺！！いきなりタメ口叩いてくる、不審者にもちゃんと敬語使ってる。流石だ」

俺に瓜二つの男は、突然高らかに笑う。

え？てか、今なんて？「さすが俺」って言ったよな？

お前が俺で、俺がお前…？

「自己紹介しよう。初めまして。俺は——」

次の一言で、俺の「日常」は終わりを告げた。

「——お前の、神様だ。名前は、ジャトランセ。『ジャット』って呼んでくれ」

天界からの使者

俺の名前は神崎直人。平凡な毎日を送る、ごく普通の高校三年生——のハズだった。

俺は今、そんな平凡をことごとく粉碎してくれた男と、横に並んでベンチに腰掛けている。

「それじゃあ、簡単に『人間界』に來た理由を説明しよう」

『人間界』だつてさ。まるで異世界から來た人みたいじゃね？

…残念ながら、その通りである。

「…ちよつと待つてくれ」

俺は、話を始めようとする男——ジャトランセ、通称ジャットを止める。

「もう一回、今朝見せてくれた奴やつてくんない？」

ジャットは黙つて、俺の前に手のひらを伸ばす。

次の瞬間——。

ボンッ。

火の玉が手のひらの上に出現する。ちゃんと熱だつて伝わってくる。

俺は、弁当箱に入っていたハンバーグを火の玉に近づける。

しばらくしてから、俺はハンバーグを火の玉から離して口の中に入れる。

「…もついいよ。サンキュ」

ジャットは、手のひらを握りつぶして火を消す。

ふう…。

やはり、こいつは「神」だ。

俺は、ホカホカに温まったハンバーグを噛みながら確信する。

「時間が無いから、さつさと説明しちまうぞ——」

今は昼休み。現在地は中庭のベンチ。

そこでジャットの話を聞きながら、弁当を食べている。

ジャットは食べないのか、と聞いてみると。

「お前が摂取した栄養分は、俺のほうにも勝手にやってくる」
だそうだ。

便利なもんだぜ…。

「——っつーわけだ。ざっくり説明した感じだが、理解した？」

ジャットは、説明の終わりを告げる。

俺はと言うと…。

「えーっと…」

頭の中がパニックだ。

俺は、食べ終わった弁当箱を袋の中にしまう。

「つまり？神様の上に神様がいて？そのトップの神様が大切なものを落として？それを拾いに来た、って感じ？」

「まとめると、そんな感じだ」

なるほどね…。

「じゃ、質問。神様の上の神様について、もっと詳しく」

「まず、人間にはそれぞれ神様がいる。一人の人間に、一人の神。

お前の神である俺が、お前の前に君臨したってわけ。んで、俺と同格の神、または世界を統治する神が一人いる。ってことだ」

「ってーことは…」

俺は、校舎の中にいる一人の生徒を指差す。

「あいつもジャットみたいな存在の神様がいるのか？」

「そういうこと」

「ジャットたちは、どこに住んでる？」

「天界」

やはりそう来たか…。

天界の生活とか、ちょっと気になるじゃねえか。

「じゃあ、神様の神様…。ええい、ややこしいな」

「ディアン、だ」

「え？」

「人間、神を統治する神の名前。覚えておけ」

「ディアン、か…」

「なるほどね。で、次の質問。トップの神様、ディアンの落とし物って？」

「それはな、『知恵』だ」

「『知恵』？」

俺は、一度聞き返す。

「そうだ。『知恵』だ。今の人間には必要ないが、後々必要になってくる『知恵』…それを落としたそうだ」

「どういうことだ…？」

「人間は、今まで様々な発明をしてきただろう？そこには、ディアンが人間に知恵を与えてきた。だから、人間は急激に発展をした」

「じゃあ、ジャットたちみたいな神が存在する理由は？」

「ディアンから与えられた知識を、悪用しないようにする監視する。または、自分が見ている人間の未来を決める」

「…は？じゃあ、俺の未来は…」

「安心しろ。お前の未来を『全て』決めているわけじゃない。選択肢を与えているんだ。未来への」

「え？ってーことは、何？ジャットみたいな神様は、俺たちに現実リアルでRPG的なものをプレイさせてるわけ？」

「ま、そう思ってくれば良いだろう」
なるほどね…。

「歴史の勉強をして、『何でこんなにうまく時代は進んでいくのか？』なんて疑問を持ったことはあるか？」

「え…？」

俺は、今まで習った歴史を思い出す。

「…確かに、うまくできてるな」

「そうだろう。それは、俺たちが人を動かしたからだ。ディアン
の命令によって」

なるほど…。

「現代になって、人間は自分で物事を判断する能力が高まった。だ
から、今は選択肢を与えるだけ。直接人を動かすことは、もうない
な」

「ふーん…。つつーか、『知恵』って具現化しちゃってるわけ？」

「それはディアン次第だ。ディアン自身の中に収めようと思えば、
収められる。どこかに置いておこうと思えば、具現化させてどこか
に置ける」

「その落し物を広いに、ジャットは派遣させられたわけだ」

ジャットは、コクリと頷く。

「なんで、ジャットなんだ？」

「それは、ディアンに聞いてみないとわからない」
「なんだよ、肝心なところを…」

すると、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴る。

「つと、時間だな。じゃあな、直人。まだ疑問は残るだろうが、ま
た放課後に」

そう言つと、ジャットは立ち上がる。

「きちんと、勉強しろよ？」

「お前のせいで、授業に集中できそうも無いよ…」

俺は、大きくため息をつく。

「ちなみに、俺たち神は人の心だつて読める。今のお前は、俺が本
当に神かどうか——つて、半信半疑だ。違うか？」

俺は、両手を上げる。降参のポーズだ。

「その通りだよ」

ふっ、とジャットが鼻で笑う。

「神様っぽいところ、見せてやるよ」

そう言つと、ジャットの背中に白い翼が生える。

「じゃあな。直人」

翼をはためかせ、飛んでいくジャトランセ。

俺は、もう一度、大きいため息をつく。

「ったく、なんでもありかよ……」

先が思いやられるな……。

意外と近い存在

下校の時間になった。

友達と一緒に、今日もたわいも無い話をしながら歩く。
楽しい時間だった。日常を味わえた。

いつもの交差点で、友達と別れる。

と、すぐに――

「よう、直人」

――ジャットが空から降りてきた。

でも、俺はジャットを無視して歩く。

ジャットは、黙って俺の隣を歩いている。

しばらく歩いて、一通りが少ない道に出る。

「ここまで来れば、大丈夫だろ」

俺は、ジャットに話しかける。

「ま、そうだな。しかし、よく俺の姿や声は、お前以外には見えな
いし聞こえないってこと、覚えてたな」

「今日聞いた話は、ちゃんと頭に入ってる」

俺は、止まることなく歩き続ける。

「質問がいくつかある」

「おう。何だ？」

「まず、落し物をした場所は特定できてるのか？」

「それが…」

ジャットは困ったように、頭をガシガシと掻く。

「…まだなんだよ」

「は？」

「正確には、何も聞かされてない。俺もディアンにそのことは聞いて
みたさ。でも、教えてくれなかった」

俺は、ポカーンとジャットの顔を見つめてしまう。

「…信用できなくなっただろ？俺のこと」

「いや」

俺は立ち止まり、不安げな顔をするジャットをまっすぐ見つめる。

「それはない。もうジャットのことは信用してる」

すると、今度はジャットがポカーンとした顔になる。

「さっきの俺は、こんな顔をしてたんだな。何か笑える。

「うれしいね。ありがとよ」

ふっ、と自嘲気味に鼻で笑いながら言う。

「神だからって、何でもわかるものじゃないのか？」

再び、俺は歩き出す。

「うゝん…」

ジャットは、少し悩んでいるようだ。

神様でも、少し悩んだりするもんなんだな。

何でかは知らないけど、少し安心した。

「そうだな。俺クラスの神は、全部が全部わかるわけじゃない。デ

イアンがどの程度わかってるのかは、どの神にもわからない」

「何か、ひとつの会社みたいだな。天界って」

俺は、クスクスと笑う。

「親近感湧くだろう？意外と近い存在かもしれないぞ。人と神ってモンは」

「かもな」

家に帰るコースから少し外れて、土手に出る。

俺は土手に座り込み、その隣にジャットも座る。

「良い景色だな。天界には、こんな景色は無い。ある意味、人間のほうが豊かな生活してるぞ」

「そりゃ、どうも」

学校では、もっと堅苦しい奴だと思ってたけど、意外と良い奴っぽいな。

「んじゃ、次の質問」

自然と、俺の口調も軽くなってくる。

「神ってのは、人間界と天界を自由に行ったり来たり出来るのか？」

「できない。俺の場合は、特別に人間界と天界の行き来の自由が許される。ディアンからの命令だから。ただ――」

「ただ？」

「もし、他の神も人間界にきたら、さっきまで俺が説明してきたことはほとんど無意味になる」

「無意味に……？」

「ま、これはほとんどありえない話だからな。気にすることは無い」
少し気になるが、深く追求するのはやめておこう。

うかつに追求したら、何か地雷が待っているかもしれないしな…。

「ジャット以外の神も、人間界に派遣されてる？」

「ディアンによれば、それは無いそうだ」

「じゃあ、ジャットは、人間界に初めてやってきた神、ってことか」

「まあな。天界から人間界は覗いてたけど、実際に来るとやっぱり違う。良い世界だ」

「ふん…」

「他に質問は？」

俺は、しばらく考える。

「とりあえずは、いいかな。急展開すぎて、そんなに疑問も思い浮かばない」

俺は、苦笑する。

「でも、お前は良い奴ってことはわかったよ」
すると、ジャットは笑い声を上げる。

「そうか。分かり合うことが出来て、何よりだ」

俺は、立ち上がる。

「さって、帰るかな。じゃあな、ジャット」

「え？おい、ちょっと待てよ」

ジャットも立ち上がる。

…え？

「あれ？ジャットと俺って、もしかして…」

「うん。俺居候。よろしく！」

…はい？

「え？マジっすか？」

「マジっす」

「うおおい！！ちよつと待て！！」

「どうした？何か問題でも？」

「ありまくりじゃコラ！！寝床は？飯は？神って風呂に入るのか？
もう、いろいろ思い浮かぶ。」

「ま、アレだな。別にそこら辺はしなくてもいいんだが…。どうせ
ならしたいだろ？なっ？」

「『なっ？』って何だよ！？神様が何考えるか知らないからね！？」

「とりあえず…。『ソフトクリーム』ってモンを食ってみたかった
んだ。奢ってくれ」

「何で！？神様ならお金くらい…」

「ほら、みんな俺のこと見れないから」

「そっいえば、そうだった。」

「わかったよ…。はい」

俺は、ジャットに向かって右手を差し出す。

「言っとくけどな」

ジャットは、俺のこの行動の意味…ソフトクリーム代をよこせ、
と言う意味を読みとって話す。

「確かに、俺は金を作り出せる。でもな、ありもしなかった金が使
えるわけ無いだろう？」

むう。確かに…。ということは…。

「奢ってくれ」

両手を合わせるジャット。

「悪いな。小遣いがピンチだから」

「お前の今の小遣いは、3万きゆうせ…」

嗚呼。神様って付き合にくい！！

「ヤダね。奢らない。つーかなんだよ。いきなり俺の前に現れとい
て…」

そこまで言うと、俺の体にいきなり痛みが走る。
理由はわからない。なぜだ？

痛みに耐え切れず、俺はその場に倒れこむ。

「天罰」

一言、ジャットは言った。

「…はい？」

俺は、声をなんとか絞り出す。

「だから、天罰。お前は、神に歯向かった」

は…、反則だ…。

「ちなみに、今は電撃。他にも、煮るなり焼くなり…」

「やめて。お願いだからやめて」

「じゃあ、奢ってくれるか？」

笑顔満開のジャットランセ。

これは…。

俺は今、人生初のカツアゲに遭っている。

相手はなんと神様。

すげえ。こんなカツアゲ、体験したことある奴俺だけだぜ？

しかも、断ったら暴力じゃなくて天罰が下る。

嗚呼、なんて理不尽ッ！！

「奢って、くれるよな？」

俺は、黙ってうなずく以外、為す術も無かった…。

トラブルメーカー！？（前書き）

こんなに駆け足な展開になる予定はなかったのですが、なぜかなってしまいました…。すいません。

いつそのこと、ハイスピードな展開にしようと思います。
どうかこれからも、お付き合いよろしくお願いします。

トラブルメーカー！？

「ありがとうございますー」

両手にソフトクリームを持った俺は、コンビニを出る。…周りの人から見れば、一人でソフトクリームを二つ買った少年、となる。

クソッ…。この上なく恥ずかしいッ！！

「さっきの土手で食おうぜ？近いし」

そんな俺はおかまいなし。ジャットがのほほんと言う。

いつかぶっ飛ばす…！！

「いや。うまいなこれ」

満足げに、ジャットはソフトクリームを舐める。

「そうかい」

「うまいモン食ってるのに、そんな顔で食うなって」

「誰のせいだよー！！」

俺がそう言くと、ジャットはまた笑い始める。

まったく…。振り回されっぱなしだ。

「…良い場所だな、ここ。気に入った」

「え？」

ジャットは、赤く染まった夕陽を見つめながら言う。

「天界には、こんな景色もないし、うまい食べ物だって無い」

ジャットは、最後の一口を食べる。

「これでよかったよ」

俺は、ジャットをじっと見つめてしまう。

神様と言っても、自然に感動したり、おいしいものを食べて嬉しくなったり…。

人と変わらないな。

「…でも、俺には義務があるからな。どのくらいの期間こっちにい

るかは知らんが、楽しむことにするよ」

しみりとした空気になる。

しかし、俺は吹き出してしまった。

「何だよ？」

ジャットが不思議そうに言う。

「いや、悪い悪い」

俺も、夕陽を見る。

「神様って、不思議だと思ってな…」

俺は、立ち上がる。

「そうだ。お前にも『神』は一応いるんだから、神頼みしといたらどうだ？『少しでも長く人間界に居れますように』ってさ」

ジャットは、鼻で笑う。

「神が神頼みか…。悪くは無いかも…」

すると、ジャットは立ち上がった。

「帰ろうぜ。お前の家に」

「何だそれ。おかしいな」

俺は、笑いながら歩き始める。

「知ってるか？直人。神頼みしたって意味無いんだぜ？」

「えっ？マジ？」

「少なくとも、俺に神頼みしたらな…」

「何だそれ…。ふざけんなー」

「ただいまー」

家に帰って、自室に入る。

「ふう、疲れたー」

鞆を放り投げ、ベッドに横たわる。

「おいおい。勉強しろよ、受験生」

「夏休み頃から始める予定」

「そうかよ。っーか、若いくせに年寄りみたいだな」

「マジでお前のせいだから!!」

「それより、飯の時間だろ?」

俺は、時計を見る。

そっか。今日はジャットに振り回されて、帰るのがいつもより遅くなっただった。

「ジャットは、食べるのか?」

「食べたいところだが…。迷惑をかけるわけにはいかないな」

「じゃ、食べてくるな」

俺は、ジャットを部屋に残してリビングへ向かった。

「食ってきたぞー」

俺は、自室に戻る。

「おう、おかえり」

ジャットは、ベットに寝転がっていた。

「今から、風呂も入ってきちゃうから」

「あ、ちよい待ち」

「え?」

ジャットは、俺を止める。

「テレビゲーム、やっててもいいか?」

「は?」

テレビゲームって…。

「まあ、いいけど…。俺のセーブデータは、使っなよ?上書きもしちゃだめだぞ」

「わかってるって」

不思議な奴…。

俺は、湯船に浸かり、「ふう」と息をつく。

そして、今日一日を振り返ってみる。

…いろいろありすぎた。

俺はこれから、どうなるのだろう…？

これが、ジャットに一番質問したかったこと。一番知りたかったこと。

でも、聞けなかった。

きっと、未来を知るのが怖いんだ…。

神が絡んでいる。きっと、とんでもないことが、俺を待ってる。どうしたものか…。

いろいろと考えていると、いきなり風呂のドアが開いた。

「えっ！？何、母さん」

俺は、突然の出来事に驚いてしまう。

しかし、目の前には…。

「えっ？何…お母さんって」

物凄い美少女が立っていた！

「はあああああああああ！？誰だお前！？」

思わず、絶叫してしまう。

「誰って…。ひどいな、お兄ちゃん」

「はあ！？」

涙ぐむ美少女。

「っーか、マジで誰だ？」

歳は…。いくつだろう。特定しにくい。髪の毛は長く、綺麗な黒。バスタオルに包まれた白い肌は、とても輝いて見える。やさしそうなの顔は、「癒し系」と言う言葉がピッタリだ。

「…って、そんなことより！！お前何だ！？人の風呂に勝手に…」

「お兄ちゃんと一緒に入ろうと…」

「俺は一人っ子だ！！兄妹なんていない！！」

目をうるうるさせる自称妹。

「…でも、驚くのも無理は無いかな？」

「は？」

「だって私、隠し子なんだもん」

ゴーン…。

俺の頭の中で、でかい鐘の音が鳴り響く。

「…は。ははっ」

「え？」

「はは。ははははははは」

「えっ…。何？」

不気味な笑い声を上げる俺に、自称妹は引く。

「そうか。疲れてるんだ。神を見るわ、こんな幻覚まで見るわ…。

ふははははははははは」

駄目だ。疲れている…。

ちよつとぬる目のお湯にして、ゆっくり入ろう…。

「そうだ、これは夢だ。とんでもない…。」

すると、自称妹は俺のほっぺたをつねる。

「痛いでしょう？夢じゃないよ？」

ああ、痛い。最近の夢は、痛みまで感じるのか。

つか、いつの間に湯船入ってるんだ？しかも、俺の膝の上に乗

っちゃって…。

ははは。もう、どうなってもいいや。

もう、どうなっても――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1530t/>

神様の落し物

2011年5月28日17時40分発行